
異世界の

するめ315

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の

【Zコード】

Z7967V

【作者名】

するめ315

【あらすじ】

ある朝、目覚めたら異世界でした。未知なる体験にわくわくします。還る方法は、おいおい考える予定。あくまで、予定。予定は未定の、小町勇姫16歳の異世界での生活は……。
「異世界の シリーズ」連載版です。

「つまりお前は、『』がどこだかも、どうして『』にあるかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

すがすがしい朝の光を浴びながら、人が4、5人寝られそうな広いベッドの上で、シーツ一枚まいただけの姿で、類をみないほどの美青年に事情聴取されている私、小町勇姫こまちゆうき16歳。ピッチピチの女子高生である。

なぜこんな事態になつたかといつと。

* * *

「…………。起き……。おい、起きる。」

「…………。お兄ちゃん……後5分……。」

「私は、お前の兄ではない。起きる。これ以上待たせんなつたらたき切る。」

「え……」

飛び起きた私が見たものは、鮮やかなブロンドのロングヘアと、エメラルドグリーンの瞳をもつた絶世の美人だった。

「……やつと起きたか。」

「…………おはようございます。つかぬことをお聞きしますが、男性の方ですよね。」

「…………男以外の何に見えると…………。」

「ですよね。あーよかつた。で、『ジジビ』ですか。」

美人改め、美青年の後ろに見えるのは、私の家が丸々入りそうなほど広く、豪華な部屋。

ベッドの上で私は裸だが、とくに気にしない。私は基本寝るときは裸族だから。このでつかいベッドにかけてあるでつかいシーツを引つ張つて身体にまいとけば問題ない。

それよりも、私の記憶が正しければ、昨日は自分の部屋のベッドに入つて寝たはず……。なぜこんなところに。

「…………これはセーラー国王の寝室だ。それより、私の質問に答える。答え次第では命はないと思え。この部屋に、ましてベッドの中などどうやって入つた。その格好を見る限り、大臣や貴族から私を誘惑するために送られてきたか。それとも、他国からの暗殺者か。」

「命のために答えますが、この部屋にどうやって入つたかはわかりません。起こされたらここでした。この格好は、誘惑や気を緩ませるためにものではなく、ただの趣味です。私、寝るときは基本裸なんですね。」

「…………どうやって入つたかわからないだと。嘘を言つた。お前、どこから来た。」

「生まれも育ちも日本國の首都東京です。」

「…………ニッポン……知らない国名だ。どこにある国だ。」

「東の方にある小さな島国です。最近私が注目してゐる主な産業は漫画やアニメです。あと、中小企業である町工場の技術力は世界一だと思ってます。」

「アニメ？マンガ？それに、東にある島国…………。東には確かに島国があるが、ニッポンとかいう名ではなく、穂澄国(ほずみこく)という国だぞ。隣国のセレナーデ国が貿易をしてゐるはず、確かに主な産業は医療だったと記憶しているが……。」

「…………このセーラー国は、何大陸にある国なんでしょうか…………。」

「……大陸の名も知らないのか……」*ヒ*は世界で最も大きいマヌー

大陸にある3カ国の一つだ。」

「……あのう……私……もしかしたら……異世界つてやつからきたのかもしないです……。」

美青年の驚きの顔を見ながら、告げた。最後の方は聞きとるのがやつとのくらい小さな声になつていた。

「い……異世界だと……。」

「はい。」

「そ……そんなの信じられるか。」

「でも、だつて……」*ヒ*の大陸の名前も國の名前も、私の全く知らないものです……。」

「……か……還り方は……。」

「わかるわけないじゃないですか。起きたら< i>ヒにいたんですよ。」

「だよな……。」

「はい。」

「つまりお前は、*ヒ*がどこだから、どうして*ヒ*にいるかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

目の前の美青年は頭を抱えてしまつた。赤の他人がこんなにパニッ
クになつていいところで悪いが、実は私、かなり異世界に興味しん
しんである。

異世界トリップという小説や映画、漫画でしかないようなことを、
直に体験しているのだから当たり前だ。

還る方法は異世界を楽しんでから探しても遅くないはず。いや、楽
しみながら探すという手もある。

家族や友達には心配をかけるかもしれないが、還つたら頭を下げて謝ろう。

今は「」の、未知なる体験を満喫したい。

「…………。…………おい。」

「はい。」

知らないうちに自分の世界に入っていたらしい。田の前の美青年が復活していた。

「お前…………不安ではないのか。」

「まあ…………不安といえば不安ですけど、今はこの未知の体験を満喫し尽くしたいです。還る方法はおいおい考えます。」

「ほう…………。」

美青年の田があやしくひかり、得も言われぬ不気味な笑みを浮かべた。
なんだかやばい感じの雰囲気である。

しかし、次の瞬間には元通り。気のせいだったかな……。

「お前、名はなんという。」

「…………名を聞くなら自分から名のる。これはどこの世界でも常識だと思つていましたが……。」

「…………バッシュ・レオン・ハルベルト＝ゼーラだ。だいたい分かつているとは思うが、この国の王だ。年は24になる。」

「小町勇姫16歳。女子高生やつてます。勇姫つて読んでください。」

「…………女子高生と言つのはなんだ。」

「高等教育を受けている女子のことと、私の国ではそう呼ぶのですよ。おじさんたちの注目的目的です。」

「……なんだか気持悪いな……。」

「仕方ありません。おじさんたちも田舎のストレスがあるのですよ。」

「…………そりゃ。…………そろそろ話を戻してもいいか。」

「はい。どうぞ。」

「お前…………いや、勇姫。この世界に興味があるといっていたな。しばらくこの世界に滞在するつもりであろう。」

「はい。」

「ならばここに住むとよ。」

「こいつ、この部屋のことですか。」

「いや、ここの城のことだ。別にこの部屋でも構わないが……。まだ婚礼の儀をしてないしな。」

「最後の方聞き取れませんでした。なんですか。」

「なんでもない。関係のないことだ。」

「そうですか……。でも、いいのですか。私を住ませても。」

「構わん。部屋は余っている。私の隣の部屋を用意させよ。それに教師もつけてやる。」

「教師？」

「この国の読み書きや常識を知つておいた方よいであら。話は通じるようだから問題ないな。」

「わー、ありがとうございます王様。」

「いや、せいぜい励めよ。それと私のことは王様ではなく、バッシュと呼んでくれ。それと敬語も無しだ。」

「はい。あ、間違えた。うん。本当にありがとうございます。」

* * *

その時の私は知る由もなかつた。

勉強の内容がお妃さま教育だなんて、知らないうちに貴族の養子に入れられてるなんて、お城の外にはバッシュがいないと一歩も出してももらえないなんて、本当に知る由もなかつた。

3年後、還る方法もわからないまま、バッシュによく似た面
ぞしの皇子を腕にかかることになるのは別のお話。

異世界の人間

この抱き枕あたたかくて、抱き心地がいいな。肌触りも好みだ。贅沢をいうならもう少しボリュームというか、肉つきというか……その辺を増やしてほしい。

まあ、好みの量となるとなかなか微調整は難しいな。

しかし、昨夜寝るときに抱き枕なんてあつただろうか。執事あたりが用意してくれたものに、疲れていて気付くことができなかつたのであらうか。

「…………うん…………うん…………。」

うるさい。唸るな。まだ寝る時間なんだ。私の安眠を邪魔するな。

そこで、ふと思つた。普通の抱き枕は唸るだらうか。

ガバッ

暗殺者かもしれないと飛び起きた。

枕もとの剣を握りベッドの隣を見た。

ベッドには、肩より少し長めの黒い髪をもつたかわいらしい少女が裸で寝ていた。

なかなかのスタイルである。

華奢で思わず触りたくなるような肩のライン。顔に似合わないボリュームの胸。胸をより強調するような細い腰。丁度いい肉つきをした足。滑らかな象牙色の肌。

すべてが私好みでむしゃぶりつきたくなるような少女……いや、女
だった。

私のベッドの中にいるところには、大臣や貴族からの貢物だらう
か。

それとも、他国からの暗殺者か。

しかし、どれも違う気がする。大臣や貴族から命をうけてやつてしま
っているなら、私を起こし誘惑しないのはおかしい。暗殺者に至つて
はターゲットの隣で寝るわけがない。見たところ武器も持っていない
ようだし、何より、私が人の気配で目覚めなかつたのが……。
普段の私であれば眠りは浅く、人の気配に敏感だ。今まで起きなか
つたことはない。

そして何より、この少女を抱いていたとき私はリラックスし、熟睡
していた。

不可解な存在である。

それにして、視界的意味で刺激が強すぎると、集中できず、考えが
まとまらない。

しばらく忙しく、女を抱いていなかつたせいだろうか。

それとも、この少女のせい。

バサ

シーツプラス上掛けを少女の身体にかけた。

視界的に遮ることもでき、深呼吸をし、落ち着いた。

とりあえずは、この不可解な存在を起こし、本人から情報をとるの
が、一番手つとり早そうだ。

「おー、お前、起きる。おー、起きる。」

「……うへえ。お兄ちゃん。後5分、……。」

完全に寝ぼけてやがる。

「私は、お前の兄ではない。起きる。これ以上待たせるよいならたたき切る。」

「え！……。」

飛び起きた少女の瞳の色は黒。この大陸には珍しい色の持ち主だ。やはり、他国からの暗殺者なのだろうか。

「……やつと起きたか。」

少女はいつもをジッと見ていて。何か企てている最中なのだろうか。

「……おはよー。あります。つかぬことをお聞きしますが、男性の方ですね。」

その質問に开端を挫かれた。

「…………男以外の何に見えると…………。」

「ですよね。あーやかった。で、いいですか。」

この場所が分からないと。おかしい。無理矢理部屋に入れられたのか？

不信に思いながらも質問に答えてやった。

「…………こはセーラ王国の寝室だ。それより、私の質問に答える。答え次第では命はないと思えた。この部屋に、ましてベッドの中など

「どうやって入った。その格好を見る限り、大臣や貴族から私を誘惑するために送られてきたか。それとも、他国からの暗殺者か。」

「いくら考えても答えは見つからない。直接聞いた方が早いだろ？」
何か尻尾を出すかもしない。

「命のために答えますが、この部屋にどうやって入ったかはわかりません。起にされたらここでした。この格好は、誘惑や気を緩ませるためにものではなく、ただの趣味です。私、寝るときは基本裸なんです。」

裸で寝る派なのか……大胆だな……。

そんな場違いなことを思いながらも事情聴取を続けていく。

「…………どうやって入ったかわからないだと。嘘を言つた。お前、どこから来た。」

「生まれも育ちも日本国の首都東京です。」

「…………ニッポン……知らない国名だ。どこにある国だ。」

「東の方にある小さな島国です。最近私が注目してる主な産業は漫画やアニメです。あと、中小企業である町工場の技術力は世界一だと思つてます。」

「アニメ？マンガ？それに、東にある島国…………。東には確かに島国があるが、ニッポンとかいう名ではなく、穂澄国ほずみこくという国だぞ。隣国のセレナーデ国が貿易をしているはず、確か……主な産業は医療だったと記憶しているが…………。」

「なんだかこいつの言つていることがおかしい。頭がいかれてるのだろうつか？」

「…………」Jのセーラ国は、何大陸にある国なんでしょうか…………。

「……大陸の名も知らないのか……」
「……大陸で最も大きいマヌー大陸にある3カ国の一つか。」

大陸の名も知らないという事実に不信感がますますつのる。

「……あのう……私……もしかしたら……異世界つてやつからきたのかもしれないです……。」

何を言われたのか一瞬わからなかつたし、反射的に返答していく。

「い……異世界だと……。」

「はい。」

「そ……そんなの信じられるか。」

「でも、だつて……この大陸の名前も國の名前も、私の全く知らないものです……。」

「……か……還り方は……。」

「わかるわけないじやないですか。起きたらここにいたんですよ。」

「だよな……。」

「はい。」

「つまりお前は、ここがどこだかも、どうしてここにいるかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

大臣や貴族がよこした者でも、暗殺者でもなかつたのはある意味よかつたが、私が思つていたよりも事態は重そつだ。

かかえていた頭をあげ、少女を観察する。

ショックを受けているかと思えば、表情はなんだかキラキラと輝い

てこる。どうしたんだ?

「おー。……おー。」

「はい。」

「お前……不安ではないのか。」

「まあ……不安といえば不安ですけど、今はこの未知の体験を満喫し尽くしたいです。還る方法はおにおに考えます。」

「ほう……。」

思わず笑みがこぼれた。

こいつなかなか面白い。肝もすわつていいようだし、何より先ほどから冷静さをかけていいない。

ホシイ。「ノノ少女ガ手元」ホシイ。

自分の欲望をはつきりと自覚した。

「お前、名はなんといつ。」

「……名を聞くなら自分から名のる。これはどこの世界でも常識だと想つていきましたが……。」

ツチ、生意気な奴だ。この私にそんなことをいつ奴は珍しい。

「……バッシュ・レオン・ハルベルト＝ゼーラだ。だいたい分かつているとは思うが、この国の王だ。年は24になる。」

「小町勇姫（じまちゆうひめ）16歳。女子高生やつてます。勇姫つて読んでください。」

「

もっと若いと思っていたが、16。なるほど、それなりつなずけるスタイルだ。

それより、やつをから思っていたが、この言葉には時々わからない単語が入る。

「……女子高生と言つのはなんだ。」

「高等教育を受けている女子のことを、私の国ではそつぱうのですよ。おじさんたちの注田の約です。」

……なぜ高等教育を受けている女子が、オヤジの注田の約になるのか理解できない。

ただ一つ言えることは

「……なんだか気持悪いな……。」

「仕方ありません。おじさんたちも注田のストレスがあるので

よ。」

「…………そうか。…………そろそろ話を戻してもいいか。」

「こいつを私の手元にからめとるための、話をしなくてはいけない。こいつを私の手元にからめとるための、話をしなくてはいけない。

「はい。どうぞ。」

「お前……こや、勇姫。この世界に興味があるといつてていたな。しばらくこの世界に滞在するつもりであろう。」

「はい。」

「ならばいじむとよこ。」

ずっととな、と心の中で付け加える。

「いひつて、この部屋のことですか。」

「いや、この城のことだ。別にこの部屋でも構わないが……。まだ婚礼の儀をしてないしな。」

「最後の方聞き取れませんでした。なんですか。」

「なんでもない。関係のないことだ。」

本音が漏れていたようだ。あぶない、あぶない。

「そうですか……。でも、いいのですか。私を住ませても。」

むしろ住んでもらわなければ困る。外に出したら最後、どこかにいつてしまいそうだからな。

部屋は……隣の王妃の間が空いているな。隠し通路もあるし、おおおいつつの部屋になるものだ。まあいいだろ。

「構わん。部屋は余っている。私の隣の部屋を用意させよ。それに教師もつけてやる。」

「教師？」

「この国の読み書きや常識を知つておいた方がよいであろう。話は通じるようだから問題ないな。」

最低限の王妃としての仕事ができないと困るしな。

「わー、ありがとうございます王様。」

變らじい笑顔でお礼を言われたが、物足りない。

「いや、せいぜい励めよ。それと私のことは王様ではなく、バッシュと呼んでくれ。それと敬語も無しだ。」

「はい。あ、間違えた。うん。本当にありがとうございますバッシュ。」

うむ、この方がしっくいくるな。

「こいつをからめ取るには、いろいろと下準備をしなければいけない

な。これから忙しくなる。

でもまあ、手始めに、私好みのドレスを着せるところからはじめる
か。

異世界の生活

とある午後の冒下がり

一般サラリーマン家庭の三兄妹の末っ子として生まれた私には、豪華すぎるほどアフタヌーンティーのセットを皿の前に考えるのは……今置かれている現状である。

この世界に来て早3週間という日々が過ぎた。

バッシュの気遣いのかいあってか、生活はとても快適だ。

食事のほとんじが、日本でいつ洋食のような感じで、とってもおいしい。

さすがお城つて感じだが、ときどき見た瞬間に食欲をなくすような青や、紫の物がでる。

口に入れてみればたいていはおいしいのだが、入れるまでの勇気が図り知れない。

服はお城だからなのかドレスが基本。

現代の女子高生には少し動きにくこづえに、コルセットは少し苦しい……。

あとなんでか知らないけど、胸の露出が激しい気がする。いつもするのが流行りなのか……。

勉強はやつぱり難しい……。

文字は、言葉が通じるからもしかして……と思ついたら読めたのでラッキーだったが、書きはビミヨー。
しかし、問題はこれだけではなかつた。

礼儀作法は身体動かすことだからまだいいとして、歴史。これが問題だつた。

貴族同士のバックグラウンドも絡めて、話されるからわけがわからぬ。

私、歴史とかやりたくないから理系クラスに進んだのにな……。

あと、お風呂。これはなかなか曲者だつた。

この国の主流は蒸し風呂で、あかすり?みたいな奴だつた。
気持ちいいんだけど……なんか物足りない。湯船が恋しい。
このことをバッシュュに話したら、なんとかしてくれるつて言つてた
から、もう少しの我慢。

バッシュュから私のお世話係に侍女と護衛が付けられた。

侍女はラナン、ナージャ、イルミナの3人。3人ともすごく美人で
可愛い。護衛はターナとラシエル2人、こちらも頼りになる姉御肌
の美人さんだ。綺麗なモノ好きの私としては、バッシュュも含めて、
いい目の保養になつている。

侍女も護衛もいらないって言つたんだけど、客人をもてなさない国
だと思われる困るつて、押し切られた。

百歩譲つて、侍女はわかる。恥ずかしいけど、お風呂とか、着替え
とか慣れないし、一人ではできないから。
でもなんで護衛……。バッシュュは危ないからだつていつてたけど、
なんで危ないんだろう……。

聞いた話によると、女性の騎士は少なくてすぐ貴重らしいのに
……。

しかも、危ないからつて、この世界に来てから3週間、バッシュュ抜
きで一度も部屋から出してもらつてない。

こんななんじや、私の本来の目的が果たせないよ。

城下の街だつて見てみたい。
せめて、ストレス解消に好きな時に庭に出るのぐらい許してほしい。

「はあ……」

思わずため息がこぼれた。

「どうかなさいましたか。勇姫様。」

近くにいた侍女のラナンが反応した。

「う~ん。だつて暇なんだもん。部屋の中ばっかりなのはストレス
たまるよ……。」

「申し訳ございません。陛下からお部屋から出でないよう言われ
ておりますので……。」

「……うん。それはわかってるよ。無理矢理部屋から出で、ラナン
達が怒られるのは困るしね。」

「勇姫様……。」

ラナンにすこく心配をかけてしまったみたいだ。

しかし……不謹慎かもしれないが、美人の憂い顔はなんて絵になる
んだろう……。

カメラ欲しい。写真撮りたい。

「 さま。 きさま。 勇姫様。」

「 は、はい。」

「大丈夫ですか？勇姫様。どこか御加減でも悪いのではないですか？」

？」

「う、ううん。平気だよ。」

「なら、よろしいのですが。」

「本当に大丈夫だつて。ところで、呼んでたでしちゃう？なあに？」
「はい。お暇だとおっしゃられた件ですが……陛下に申してみてはどうでしょう？勇姫様のためであればお時間を作つていただけると思いますし、最低限お庭ぐらいの許可はいただけると思います。」「そうかなあ。」

「ええ、陛下は勇姫様からのお願いは断れないですから。」

「ううん。じゃあ、夕食のときにも頼んでみようかな。」「それがよろしいかと思います。ところで、勇姫様。」

「ん。なあに。」

「今朝も夜着を着ていらつしゃいませんでしたね。」

「……だって、裸の方が気持ちいいんだもん……。」

「……勇姫様……お願ひですから夜着をまとつてお休みください。獸を刺激し、要らぬ火の粉を被ることになりますよ。」「……それは、どういう意味？」

「いいえ、なんでもござこません……。」

そのまま、火の粉発言は流されてしまった。

しかし、私は、この発言を深く追求しなかつたことをのちに後悔することになる。

気付かなかつたのだ、侍女たちが、護衛の騎士までもが執拗に私に夜着を着せようとしている理由を。

知らなかつたのだ、バッシュが秘密の通路を通つて夜中にこの部屋

にかよつている」と。

侍女や護衛たちが、こんなにも私を守つとしてくれていたの

。

異世界のH宮事情

夜も更け、深夜とも言ひべき時間、国王の寝室から隠し通路を通り、王妃間の寝室へと入る。

物音をたてぬよつこに慎重にベッドへと、近づく。

ベッドの近くには、ベッドの主が脱いだであろう夜着が落ちている。

ギシ

ベッドのふたりに腰をかけ、ベッドの主である少女の頬に触れる。

「勇姫……。」

名を呼び、起きなうことと確認する。

「…………。」

唸るのは二つものひと、妙心して触れることがある。

顔にかかる髪を梳き、額、瞼、頬、頬筋、胸、足、順を追つて触れるだけの口付けをする。

最後に、愛らしげに唇に深い口付けをする。

ひぢりやへへ

「うん……ん……。」

苦しいのだらうか、勇姫が鼻にかかった卑猥な唸り声を上げ、顔をそむけようとする。

だが、まだ、逃がす気はない。

顔を固定し、より深く口付けていく。

くちゅあ、ぴちゅ

「んん……あはあ……つうん……。」

時間にして、およそ5分くらいだろうか、唇を離す。口付けの後の腫れぼったい唇に、名残惜しさを感じながらも、これ以上やると止まらなくなるので、王妃の間の寝室を後にする。

これが最近の私、バッシュ・レオン・ハルベルト＝セーラの日課である。

本音を言えば、もつとしたいし、あの美しい身体を味わいたい。

しかし、勇姫はセーラ国 の女子の成人年齢である17歳をまだ迎えておらず、国王たる私でも、国の法律を破れば処罰が下る。それに、婚前交渉などして、勇姫が貴族の馬鹿どもに、身持ちの悪い女だと言われるのは我慢ならない。

そしてなにより、勇姫の心がまだ私に向いていない。

まあ、これについては、おいおい向かせていくし、妹思いの兄たちのおかげで、恋人や思い人がいなかつたことも調査済みなので、問題ない。

勇姫の異世界生活は、ほとんど問題なく行えているようだ。

ただ、やはり異世界、生活の仕方が違うらしい、時々微妙な顔をしている。それもまた、愛らしい。

我慢できないときは、かわいらしい『お願い』をしてくれる。これは、鼻血なのだ。

『わがままは言っちゃいけないけど……でも、どうしても……。』
とこう感じがありありと伝わってくる。

今夜の夕食の時も『庭の散歩がしたい』といつお願いに、即効許可をだした。

ただし、侍女や護衛がいようと、私の目の届かないところに勇姫がいくのはいやなので、毎日、午後のひと時を勇姫と散歩することに決めた。

城下にもいきたいようなので、最低でも半月に一度は勇姫と城下に出かけることも決めた。

また、風呂の件だが、勇姫の世界では、湯船に湯をためて入るが一般的だったようだ。そういう風呂が城の中にはないわけではないが、他国からの来賓用が主であり、個人用ではなく、多人数向けである。勇姫の肌を誰かれ構わず見せる気にはならないので、王妃の間の隣の部屋を急遽改装中である。

将来的に、いつしょに入るのがたのしみである。
たのしみはこれだけではない。

勇姫のドレス姿、これまた鼻血物である。

勇姫に着させているドレスは、勇姫より少し年齢が上の、この国で結婚適齢期といわれる年代、18から20歳の女子が好んで着るデザインの物を着させている。

あの幼い顔と、顔に似合わないスタイルとがあいまって、背徳的でたまらない。

まあ、常にドレスでいる必要はないのだが、着る習慣がなかつたようなので、慣れてもらうためにも着させている。

勇姫の生活が滞りなく行えているのも、私のたのしみが満たされているのも、勇姫に付けた侍女や、護衛が優秀なおかげであるが、いかんせん、奴らの視線が痛い。

主である私に向ける視線ではない。しかし、勇姫を思つてのことだと思うと何とも言えない。それに、あの視線がなければ、間違いを起こしていったかもしないことは、一度や二度ではない。

だがしかし、勇姫に夜着を着せて寝かそ удするのをやめてほしい。勇姫の美しい四肢眺め、時々は口付け、将来についての想像をめぐらす。それこそが、満たされる欲望を持った私の、毎夜、一番のたのしみなのだ、奪われてしまつたらたまつたものではない。欲望が爆発し、勇姫に襲い掛かる。これは、まず、間違いない。

だからこそ、欲望が爆発しないうちに、勇姫が17になつた折には、すぐにでも婚礼の儀を行いたいと思っている。でなければ、法律を犯すことになる。それは、一国の主としてはあまりにも情けない。

セーラ国では、王の正妻である王妃にはある程度身分が必要になる。貴族であれば、侯爵以上の家の出であることが望ましい。側妃や愛妾となると、あまり身分は関係ないのだが、勇姫以外を妻にするつもりはない。

しかし、勇姫は異世界出身。この国での身分など無いに等しい。となると、ある程度の貴族に養子に出すことが望ましい。侯爵以上で、政治的な力もあり、王に歯向かわず、勇姫の力となってくれる存在……。

思わず顔に笑みが浮かんだ。

「セルドル公爵家に養子として迎えてもらおうつ。

私の欲望を秘めた声が、深夜、一人きりの寝室に響いた。

異世界の家族

「……て……ださい。……おきて……やご。起きてください。勇姫様」

「……うんん。あと……10分。」

「ダメです。今日はお客様がお見えです。」

「……お客様……。」

「おはようございます、勇姫様。今田も裸で寝ていらっしゃいますね。今日はお客様が見えていらっしゃいますよ。」朝食はお客様といつしょにとつていただきます。」

「おはよう、イルミナ。裸で寝てたのは……クセだからね……」「…………」「めんなさい。」

イルミナに睨まれた……。美人の怒った顔はめちゃくちゃ迫力がある。思わず謝つてしまつた。本当に裸で寝るのやめようかな……。

「いいえ。反省してくださつたならいいんですよ。毎日同じことを言つている気がしますけどね。」

「本当にじめんなさい。……と……といひでお姫さまって、誰なの。私この世界に知つてる人少ないよ。」

「お姫様とは、セルドル公爵と公爵夫人ですね。詳しい説明は同席なさる陛下の方からあると思いますので、私からはひかえさせていただきます。」

「セルドル公爵と夫人……。セルドル公爵家……歴史の授業でやつたような……。ううーん、何代か前の王弟で、バッシュのお母さんがセルドル公爵家の出だつたような……。」

「素晴らしい記憶力ですね。さすが勇姫様ですね。」

「えへへ、これでも学校の成績は良かったんだよ、学年5位。」

「まあ、本当に素晴らしいですね。ですが、裸で言われても説得力に少々かけますね……。」

「うつ……。そうだね。」

「さあ勇姫様、お客様をこれ以上お待たせするわけにはまいりませんので、お早く準備をしましょ。」

「うん。」

知らない人に会つのたのしみだな。この世界のこといろいろ教えてくれるかな。

* * *

身支度を済ませ、お客様が待っているという部屋にイルミナとラシエルと向かう途中でバッシュュにあった。

「あ、おはよう、バッシュュ。」

「うむ、おはよう。これから、密間に向かうのだろう?ともに行こう。イルミナ、ラシエル私がともにいるから下がって構わない。」

「ですが、なにかあつたら危険です。騎士としてともに行くのが私の仕事です。」

「下がれと言つていてる。」

「……はい、失礼させていただきます。」

「では陛下、失礼します。ラシエルともに行きましょう。」

むむむ、ラシエルを怒つて氣落ちさせるなんて、バッシュュはどういうつもりなんだ。美人は意氣消沈しても美人だけど、私はかわいくてきれいな女の人の味方だぞ。

「うむ、いったな。さあ、勇姫行こうか。ん……どうしたんだ勇姫?」

「むー、女の子にあんなに怒るなんて、バッシュュはどういうつもりなの。」

「あれは、国王である私の命令を無視したんだから、仕方あるまい。」

「でも、あれは王様であるバッシュュのことを心配して言つてたんだよ。あんな言い方しなくてもいいじゃない。ラシエルはがんばってるもん。またこんなことがあつたら、バッシュュのこと嫌いになるからね。」

「ああ、すごい子供っぽい。」

バッシュュが言つてることが、この国では正当だつてわかるけど……でも、やっぱり、こんなに良くしてくれて、いるバッシュュが、傲慢な王様になつてほしくないもん。」

うーん、一宿一飯の恩義？ 友情？ 母性？ とにかくバッシュュには、このままいい王様でいてほしい。

「すまなかつた、勇姫。今度から気を付ける。後でラシエルにも言つておひづ。……だから、嫌いになるだなんていうな。」

なんでバッシュュは、嫌いになるくらいでこんなにあせつて、いるんだろ？

「ううん。わかつてくれたならいいよ。嫌いになるなんて言つてごめんね。お客様が待つて、いるんでしょう？ 早く行こう。」

「ああ、わかつたよ。私が悪かったこともちゃんと。そうだな、これ以上客を待たせるわけにもいかないから行くか。」

「うん」

コンコン、ギイー

「入るぞ、セルドル公爵。公爵も夫人もよく来てくれたな。」

「陛下がお呼びとあらば、私も妻も喜んで参りますよ、かわいい甥っ子のために。それに、今日はかわいい娘にもえることですし。」

「……むすめ？ ねえ、バツシヨヅルいう」と。

「ああ、勇姫紹介する。セルトル公爵と、婦人たる者たちが、お前の両親になる。」

「初めまして、勇姫ちゃん。ラドクリフ・フォン・セルドルだよ。今日から君のパパになるんだ。こっちは妻のサー・シャ・モルト・セルドルでママだよ。パパ、ママって呼んでね。」

一七八
れんか

か……会話についていけない……。パパ?ママ?両親?ビックリ

確かに、こんなロマンスグレーの茶髪にエメラルドグリーンの瞳の、ダンディーなおじ様がパパならうれしいし、こんなふわっふわのライドブラウンの髪に、ブルーの瞳の巨乳美少女がママなら自慢できる。

「…………バツシユ、どうじうじと。」

「…………く…………詳しい話は朝食を食べながらにしよう。」

*
*
*

力チャ力チャ

朝食をとりながら事情を聴いた。要約すると、以下二つに分類される。

朝食をとったから事情を聴いた
要約すると、こうこうことらし

この世界には私の戸籍がない。戸籍を作るために、どうかの養子に入れる必要があった。

どうせ養子に入れるなら、身分がある家がいいだろ?といつて、バッシュのおじさんにある公爵に声をかけたら、返事が返ってきた、とこいつことりしこ。

それでもって今日は顔合わせと、養子縁組みの書類にサインをするらしこ。

「私たち娘がほしかったの。でも、主人との間には息子しか生まれなくて……。3人も作ったのに全部息子。

かわいくもなんともないわ。でも、陛下に声をかけていただけて一も一もなく返事をしたわ。」

「はあ……。」

「これからよろしくね、勇姫ちゃん。」

「はあ……よろしくお願いします。どういで、サー・シャさんはずめ幾つかなですか。」

「ママって呼んで。」

「あの……サー」

「ママ」

「……ママはお幾つなんですか。」

「主人と同じ年よ。42歳。」

「よんじゅーに……。」

「いや、こんなに若い42がいるのか!?!?!少女にしか見えん。

「あー、サー・シャだけママって、呼んでもうつてずるこぞ。勇姫ちゃん、私のこともパパって呼んで。」

期待のこもった田……あきらめるしか道はない。本当の両親ですら父さん、母さんと呼んでいたのに……。

「……パパ……。」

ガバ

パパに抱きしめられた。

「もう、勇姫ちゃん超かわいい。こんな娘がてきて本当にうれしいよ。」

「まあ、パパずるいわ。私も仲間に入れてくださいな。」

ギュ

ママも参加。

ロマンスグレーと年齢不詳美少女、一般人の人間サンドウイッチ完成。

うわー、ママの巨乳が当たるよ。パパからはい匂いするしサイコ！。

「仲良くなるのは結構だが、勇姫を返してもらおう。」

「なんで？両親ができたってことは、私、お城を出て、セルドル公爵家のお家に行くんじゃないの？」

「勇姫を外に出すわけないだろ？。それにこの世界での勇姫の家はここだ。」

ちえつ、セルドル公爵家のほうが自由に異世界ツワーカーできるかと思ったのに……。まあ、バッシュの近くのほうが安心かな。

「勇姫ちゃん。陛下がケチだから一緒に生活はできないけど、今度家にもおいで、部屋も用意してあるから。ここだけの話、家出して

きてもいいんだぞ。」

「そうよ、勇姫ちゃん。絶対にいらっしゃいね。そのとき息子たちを紹介するわ。」

「家出なんてやせらるかー。」

騒動の中、異世界文字で読めるけど、読みにくい書類の言われたところに3枚サインした。

その中の1枚だけ最も重要なものなのか、正式名でサインといわれ、漢字と異世界文字の「じゅうじや」混ぜでサインした。

小町勇姫、16歳。異世界で家族ができる、勇姫・小町・セルドルになりました。

両親はなんだかつかめませんが、面白そうな感じがします。義兄たちに会つのも楽しみです。

言われた通りにサインしたから知らなかつた。これが、婚姻のための養子縁組みだなんて……。「じゅうじや」混ぜサインの書類が婚姻届けだなんて……。私は知らなかつた。

異世界の家族（後書き）

続くと思つ。

異世界の罠（前書き）

家族のバッシュ視点です。

今朝は、セルドル公爵である我が叔父と夫人が、養子縁組みの話で、朝食をともにすることになつてゐる。

勇姫も同席さるつもりなので、今は勇姫の待伏せ中だ。

コソコソ

勇姫の部屋の方角から足音が聞こえた。

待伏せをしていたのではなく、今来た感じを装いながら、勇姫が到着するのを待つた。

「あ、おはよう、バッショ。」

今日も勇姫はかわいい。昨夜ももちろんかわいかつたが、ドレスを着ていると、逆に中身を想像させる。なんとも言えない色香がある。

「つむ、おはよう。これから、客間に向かうのだろう? ともに行こう。イルミナ、ラシエル私がともにいるから下がつて構わない。」

せっかくの一人つきりの時間、邪魔はいらん。城の警備は完璧と言つてよいし、勇姫は私が守る。

「ですが、なにかあつたら危険です。騎士としてともに行くのが私の仕事です。」

ラシエルの目線が痛い。私のことを危険視しているな。

確かに勇姫はとてもなくかわいいが、犯罪者になる気はないし、今朝は勇姫を娶るために重要な日であるといえる。我慢できる。

そういう意味合いで、ラシエルに目線をくれてやつた。

「下がれと言つている。」

「……はい、失礼させていただきます。」

「では陛下、失礼します。ラシエルともに行きましょう。」

二人とも理解してくれたようだ。我が城に努めるものは優秀だ。

「つむ、こいつたな。さあ、勇姫行こうか。ん……どうしたんだ勇姫？」

勇姫に視線を向けると、なんだか不機嫌であるようだ。そんな姿もかわいく見えるから、私もどうかしている。

「むー、女の子にあんなに怒るなんて、バッショウはどうこうつもりなの。」

「じつやら先ほどのことで、ご機嫌がなめらしい。」

「あれは、国王である私の命令を無視したんだから、仕方あるまい。」

「でも、あれは王様であるバッショウのことを心配して言つてたんだよ。あんな言い方しなくてもいいじゃない。ラシエルはがんばつてると。またこんなことがあつたら、バッショウのこと嫌いになるからね。」

「…………嫌いになるだと…………！」

間違つてもそんなことはさせん。

それに先ほどのは、私を心配したんではなく、主であるお前を心配していたんだ。

うむ、それを考へると、先ほどのラシエルの行動は騎士として褒められるものであろう。

「すまなかつた、勇姫。今度から氣を付ける。後でラシエルにも言つておこひ。……だから、嫌いになるだなんていうな。」

勇姫に嫌われたら生きていけない。勇姫以外娶る氣もないから、後継ぎがいなくなつて國も亡びる。

「ううん。わかつてくれたならいいよ。嫌いになるなんて言つてごめんね。お客様が待つているんでしょう？早く行こう。」

勇姫はなんて優しいんだ。人をすぐに許すことができる素直さ、周囲に氣を使うこともできる。

私の伴侶は本当に素晴らしい。

「ああ、わかつたよ。私が悪かったこともちゃんと。そうだな、これ以上客を待たせるわけにもいかないから行くか。」「うん」

＊＊＊

コンコン、ギィー

「入るぞ、セルドル公爵。公爵も夫人もよく来ててくれたな。」

「陛下がお呼びとあらば、私も妻も喜んで参りますよ、かわいい甥っ子のために。それに、今日はかわいい娘にもあえることですし。」「

食べぬことをいう。

叔父は政敵にはならないが、決して味方にもならない。

今日は、夫人たつての希望と、自分の欲望を叶えたのであります。愛妻家といつのは周知の事実であるから。

「……むすめ？ねえ、バツシユビウニウ」と。

「そういえば、勇姫にはまだ何も話していなかつたな。

「ああ、勇姫紹介する。セルドル公爵どじ婦人だ。そして今日からお前の両親になる。」

「初めまして、勇姫ちゃん。ラドクリフ・フォン・セルドルだよ。今日から君のパパになるんだ。こつちは妻のサー・シャ・モルト・セルドルでママだよ。パパ、ママって呼んでね。」

「…………」おおやん…………本当に何考へてんだ…………。

「よひしきね、勇姫ちゃん。それにしても、こんなにかわいい娘で、私、うれしいわ。」

夫人も笑顔で、何を考えているかつかめないが、娘の誕生を喜んでいるのだと思う……。

ところで、勇姫が何の反応も示さないがどうしたのだ？！

「…………バツシユ、ビウニウ」と……。」

「…………言葉の端々にとげがある…………。先ほどの可愛らしげ機嫌斜めと違い、勇姫の背後からなんだか黒いものが…………。」

「…………く…………詳しい話は朝食を食べながらじよつ。」

* * *

「 というわけだ。」

「わかった。要は私がセルドル公爵家に養子に入ることで、戸籍を作るつてことね。」

「そういうことだ。勝手に決めて悪かったな。」

「私のことを思つてのことでしょう。ありがとね、バッシュ。」

そのありがとうの笑顔に多少の、罪悪感を覚える。

勇姫を娶るための養子縁組みでだが、幸せにすると、心中で誓つ。

「この3枚の書類にサインして貰れるか？特にこの一枚は正式な名前で頼む。」

「正式な名前？」

「勇姫の名前は、勇姫の国の言葉で書いてほしいんだ。」

「漢字つてこと？」

「カンジがなんだかはわからんが、正式な文字がそつならそれだ。」「ん、わかった。」

正式なサインが必要な書類はこの国では、婚姻届だけだ。養子縁組みの書類に混ぜて出したので、勇姫は疑つていなかつた。

勇姫がサインしようとしたその時、公爵夫人が声をかけてきた。

「私たち娘がほしかつたの。でも、主人との間には息子しか生まれなくて……。3人も作ったのに全部息子。かわいくもなんともないわ。でも、陛下に声をかけていただけて一も二もなく返事をしたわ。

「 はあ……。」

「これからよろしくね、勇姫ちゃん。」

「はあ……よろしくお願いします。とにかく、サーシャさんはお幾つかですか。」

「ママって呼んで。」

「あの……サー」

「ママ」

「……ママはお幾つなんですか。」

「主人と同い年よ。42歳。」

「よんじゅーに……。」

言いたいことはわかるぞ……私もこの人が信じられないからな……。

「あー、サーチャだけママって、呼んでもらってずるーいぞ。勇姫ちゃん、私のこともパパって呼んで。」

本当にこの人は何を考えているんだ。

そんな目で見たら勇姫が、断れるはずないだろう。

「……パパ……。」

ガバ

勇姫がセルドル公爵の希望をかなえた瞬間、あわてておっさん
は抱きついていた。

「もう、勇姫ちゃん超かわいい。こんな娘ができるて本当にうれし
いよ。」

「まあ、パパずるいわ。私も仲間に入れてくださいな。」

あまりのことに思考が停止している間に、夫人も参戦。
人間サンドの完成だ。

私の勇姫に何をしてくれる。

「仲良くなるのは結構だが、勇姫を返してもうむづ。」

「私だって、起きてる勇姫を抱きしめたことはまだないんだ。そんなうらやましい」と、他人にさせてたまるか。

「なんで？両親ができたってことは、私、お城を出て、セルドル公爵家のお家に行くんじゃないの？」

勇姫が恐ろしことを言ひ。そんなことをせるわけがないだひ。

「勇姫を外に出すわけないだひ。それにこの世界での勇姫の家はここだ。」

勇姫の家はこの先ずっとここだ。

「勇姫ちゃん。陛下がケチだから一緒に生活はできないけど、今度家にもおいで、部屋も用意してあるから。ここだけの話、家出してきてもいいんだぞ。」

「そうよ、勇姫ちゃん。絶対にいらっしゃいね。そのとき息子たちを紹介するわ。」

息子を紹介するだと……私のいないところで、勇姫に男が近づくなんて許さん。

「家出なんてさせぬかー。」

私が騒いでいる間に、勇姫は書類を完成させていた。

養子縁組みの書類は、戸籍を管轄している役所に出すとして、婚姻届は、勇姫の17歳の誕生日まで私が大切に保管することに決めた

o

異世界の罠（後書き）

セルドル公爵の趣味は、甥っ子であるバッシュをいじめることが大好き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7967v/>

異世界の

2011年8月15日07時16分発行